

## 博士論文要旨

看護学研究科 博士後期課程	学籍番号 D18603 氏名 角山 裕美子
論文題目	在宅終末期高齢がん患者の意思実現にむけた訪問看護モデル —最期までその人らしさを支援するアプローチ—
<p>【目的】我が国は、超高齢多死社会を迎え、がん疾患は死因の第1位である。在宅終末期がん患者に携わる機会の多い訪問看護師は、患者の意思を捉え、最期までその人らしさを支える必要がある。在宅終末期高齢がん患者の生活上の好みや願い、成し遂げたい事柄といった患者の意思を実現するためには、生活と医療からアプローチできる訪問看護師の実際的な支援を可視化する看護モデルの作成が必要と考えた。そこで本研究では、在宅終末期高齢がん患者の意思実現にむけた訪問看護モデルを作成することを目的とした。</p> <p>【方法】本研究の方法は、研究Ⅰ、研究Ⅱの2段階を経た。研究Ⅰでは、在宅終末期高齢がん患者のその人らしさを最期まで支え、患者の意思実現にむけての支援経験を有する訪問看護師への半構造化インタビュー法による調査から、支援内容および方法を抽出し、それらを質的記述的に分析した。その結果を基に、在宅終末期高齢がん患者の意思実現にむけた訪問看護モデル案（以下、モデル案）を作成した。研究Ⅱでは、モデル案の妥当性および実用性について、実践家で構成されたフォーカス・グループ・ディスカッションにより検討した。ディスカッションの意見と先行文献、事例の分析結果を踏まえてモデル案を修正し、最終的なモデルを作成した。このモデルの作成過程では、McEvoy&amp;Egan (1979)の看護介入モデル開発を参照した。本研究は、新潟県立看護大学倫理委員会の承認(020-7)と学長の許可を得て実施した。</p> <p>【結果】本モデルは、「活動の目標」すなわち「最期までその人らしく、意思を実現して生活を送る」を目指す訪問看護師の支援を示した。モデルの「介入の焦点」は、【人生の最終段階の医療・ケア、最期の場所の選択等のアドバンス・ケア・プランニング(Advance Care Planning ; ACP)】【緩和ケアに焦点を当てたケアの実践】【日々の生活の中での意思実現の支援】【在宅(病院)で最期までその人らしく意思を実現し、安らかな死に向けた支援】であった。これらの「介入の焦点」に沿って、「看護活動」および「具体的方法」を示した。「成果」は、「患者は意思を実現した生活を送り、最期までその人らしく生き、患者と家族、医療者ら関わる人々が納得して最期を迎えられる」であった。</p> <p>【考察】本モデルの独自性は、継続的な訪問看護の提供を通して、在宅終末期高齢がん患者が最期までその人らしく生き、死を迎えられることを目標に、患者および家族の意思を汲み、関わる人々と合意形成しながら患者の意思実現を支援する一連の看護実践が示されたことである。今後は、実践現場での活用に向けて、本モデルの実装方法の検討が必要であると考えられる。</p> <p>キーワード：在宅終末期高齢がん患者、意思実現、訪問看護モデル</p>	